

総合的な学習の時間を中核とした地域連携に関する カリキュラム・マネジメント

—校内組織構築とカリキュラム改善を推進する教頭の機能に着目して—

Curriculum Management for Regional Collaboration in the Period for Integrated Studies

— Focusing on the Function of Vice-Principal

to Promote School Organization Construction and Curriculum Improvement—

長倉 守¹, 平田聡子²

NAGAKURA Mamoru¹, HIRATA Satoko²

[キーワード Keyword]	総合的な学習の時間, 地域連携, カリキュラム・マネジメント, 教頭
[所 属 Institution]	¹ 岐阜大学大学院 (Graduate School of Education, Gifu University), ² 岐阜県公立小学校 (Public Elementary School, Gifu Prefecture)

[要 旨 Abstract] 2017 年版学習指導要領は社会に開かれた教育課程の理念を掲げ、総合的な学習の時間を教育課程及びカリキュラム・マネジメントの中核として位置付け、地域や学校、児童生徒の実態に応じて探究課題を設定するとともに、学校内外の教育資源を活用し、学びの充実を図ることを求めている。しかしその実現は各学校の創意工夫に委ねられ容易なことではない。これらの推進には、カリキュラム・マネジメントを学校経営戦略として位置付け、校内組織やカリキュラムの整備、地域連携の構築等に取り組むことが重要となる。そこで本稿では、学校経営において校長を補佐し、校務整理の要職として位置付けられる教頭の機能に着目した。地域連携を通じた総合的な学習の時間のカリキュラムの組織的改善が経営戦略上の課題である事例校の検討を通じて、カリキュラム・マネジメントを推進する教頭の機能を3つに整理した。そのうえで事例校において、教頭の機能を発揮させる実践開発を行い、組織構築やカリキュラム改善、児童の学習状況への影響について検証し、一定の効果を確認した。

1. はじめに

2017 年版学習指導要領は、社会に開かれた教育課程の理念を掲げ、学校と社会が連携・協働してこれからの社会に応じた資質・能力を児童生徒に育むことを求めている。総合的な学習の時間については、教育課程の中核として位置付けられ、地域や学校、児童生徒の実態に応じて探究課題を設定するとともに、様々な外部の教育資源を活用し、学びの充実を図ることが求められている。これらを推進するためには、校内組織やカリキュラムの整備、地域連携の構築等といったカリキュラム・マネジメントが重要である。

学習指導要領では、校長の方針の下に、教職員が適切に役割を分担しつつ相互に連携したカリキュラム・マネジメントが規定されている。しかしながら取り組むべき課題が多く、その実現は各学校の創意工夫に委ねられ容易なことではない。現在、学校においては社会に開かれた教育課程の実現に向けて、地域の交通安全協会と連携した登下校の見守り活動、地域行事や学校行事への参加、クラブ講師などの学習支援ボランティアとしての地域人材の位置づけなど、学校や地域の実態に応じた連携が図られつつある。その一方で、学習指導要領が求める、児童の学習活動を保障する教育課程を介した学校と地域の連携・協働は十分とは言えない。この背景には、学校内における地域連携に関する組織体制と学習指導要領や地域・児童の実態を踏まえたカリキュラムの未整備が課題として存在する。これらにより授業実践における地域資源の活用、教育活動の意図や育成すべき資質・能力に関する学校と地域との共有に困難がある。

先行研究では、中留・曾我 (2015) が総合的な学習の時間における連関性と協働性に焦点をあてたカリキュラム・マネジメントの枠組を提示している。教育活動の内容・方法上の視点と条件整備活動の視点を踏まえて、総合的な学習の時間における組織体制構築とカリキュラム改善に関する構造図に整理している。これは、地域課題を探究課題とする総合的な学習の時間を中核としたカリキュラム・マネジメントの推進に重要

な視座であるが、理念的な指摘に留まり検証については蓄積されていない。またカリキュラム・マネジメントの推進にはリーダーシップの重要性を指摘されているが、スクールリーダーの視点から論究されたものは管見の限り見られない。

そこで本稿では、組織体制構築とカリキュラム改善を内包するカリキュラム・マネジメントをはじめ、学校運営において校長を補佐し、校務整理の要職として位置付けられる教頭の機能に着目する。事例検討をもとに、対象校における総合的な学習の時間を中核とした地域連携に関するカリキュラム・マネジメントを推進する教頭の機能について整理する。そのうえで教頭の機能の発揮を基軸に対象校において実践開発を行い、組織構築やカリキュラム改善への影響について検証することを目的とする。

2. 方法

2.1. 事例校の選定

事例検討の対象として、総合的な学習の時間を中核とした地域連携に取り組むA市立A小学校を事例校とした。A小学校は第二筆者が教頭として所属する教育機関である。A市の人口は約9万人、校区には田園風景や工業団地が広がる。20XX年度の児童数は307人、教職員数は20人である。本稿に関する実践開発については校長の承諾を得た。事例校の状況については、強みとして個々ではあるが地域連携の有効性を認識する教職員や協力的な地域人材の存在がある。一方で、課題としてそれらの接続を促進する校内組織とカリキュラムの未整備が挙げられる。校内組織やカリキュラムの未整備、またこれらの分断により地域連携が停滞する状況の改善を図ることが課題となっている。

2.2. 実践開発の概要

まず事例校において、総合的な学習の時間を中核とした地域連携に関するカリキュラム・マネジメントを学校経営戦略として位置付け、校内における組織体制の構築として地域連携指導部を設置するとともに地域連携担当教員を配置することとした（図1）。地域連携指導部には、教員に対する相談機能や地域人材への架橋、カリキュラム改善支援の機能を持たせることとした。またカリキュラムの改善について、学校教育目標を踏まえた総合的な学習の時間の目標の設定、それを踏まえた児童に育成すべき資質・能力や地域連携の視点の明確化を図った（図2）。

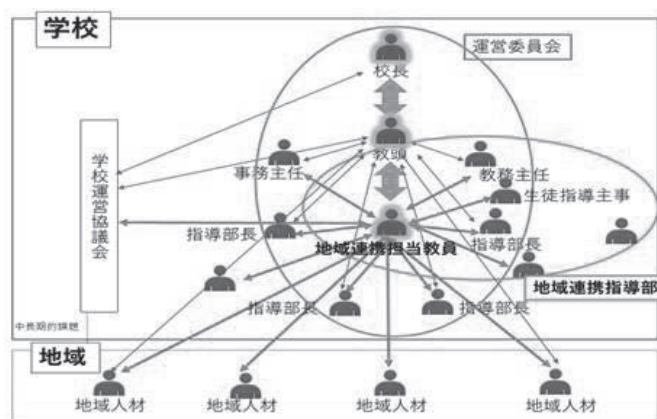


図1 地域連携に関する校内の組織体制

そこで課題となるのは、学校運営において地域連携指導部をいかに機能させ、児童の資質・能力の育成を図る教員の支援やカリキュラムの充実に連動させるかである。その要職として位置付くのが教頭である。組織体制、カリキュラム、地域連携が分断する状況の改善を企図して、事例校において発揮が期待される教頭の機能を整理した（表２）。

これらをもとに、教職員を対象として、また教職員が指導にあたる児童を間接的な対象として、20XX年4月から11月まで、教頭の機能を発揮して総合的な学習の時間を中核とした地域連携に関する実践開発を行った。

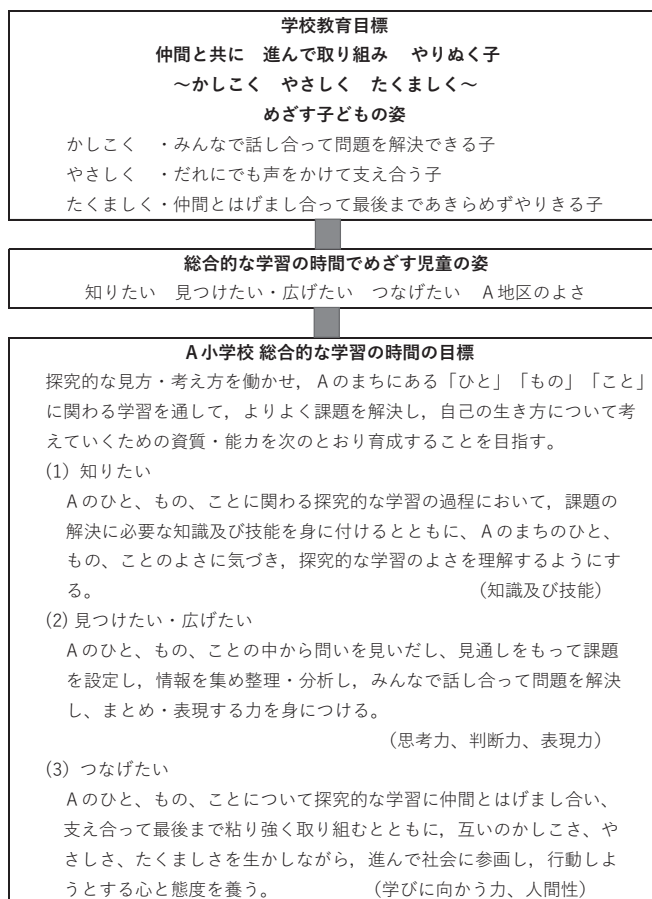


図2 学校教育目標を踏まえた総合的な学習の時間の目標

2.3. 実践開発における教頭の機能

教頭の機能については、表2のとおり3つに整理した。一つは、運営委員会構成員間の合意形成に向けた総合調整である（図2）。校長の経営方針の具現化と進言、地域連携担当の配置と機能的な参画への支援、地域連携や総合カリキュラムに係る検討の場の確保の3つの機能がある。

二つは、地域連携担当を軸とした校内協働体制の構築に向けた総合調整である（図3）。地域連携担当と他の職員との円滑な連携に向けた支援、地域資源や総合カリキュラムに係る情報提供の支援、地域連携やカリキュラム改善に資する相談体制の構築と支援といった3つの機能がある。

三つは、地域連携担当を軸とした地域との連携強化に向けた総合調整である（図4）。総合カリキュラムに係る地域資源との関係構築と維持継承、地域連携担当と地域資源に係る情報共有とデータベース化支援、地域連携担当の窓口機能の明確化と広報活動の推進の3つの機能がある。

表2 教頭の機能の整理

1. 運営委員会構成員間の合意形成に向けた総合調整	① 地域連携に係る校長の経営方針の具体化と状況把握に基づく進言
	② 地域連携担当の運営委員会への配置と機能的な参画への支援
	③ 運営委員会における地域連携や総合カリキュラムに係る検討の場の確保
2. 地域連携担当を軸とした校内協働体制の構築に向けた総合調整	① 地域連携担当教員と学年部、関係職員との円滑な連携に向けた支援
	② 地域資源や総合カリキュラム開発に係る全職員に対する情報提供への支援
	③ 地域連携や総合カリキュラム改善に資する相談体制の構築と支援
3. 地域連携担当を軸とした地域との連携強化に向けた総合調整	① 総合カリキュラムに係る地域資源との関係構築と維持継承
	② 地域連携担当と地域資源に係る情報共有とデータベース化支援
	③ 地域連携担当の窓口機能の明確化と広報活動の推進

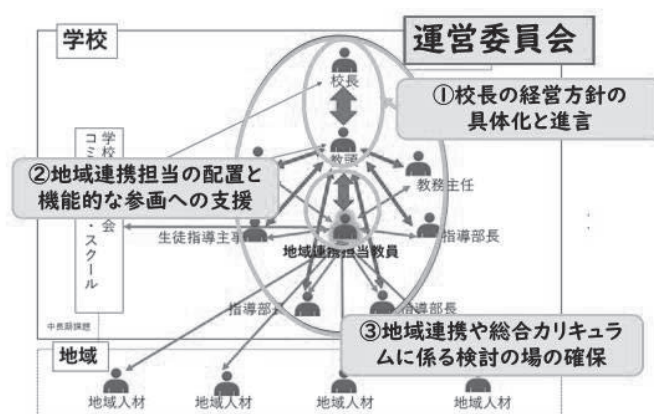


図2 運営委員会構成員間の合意形成に向けた総合調整

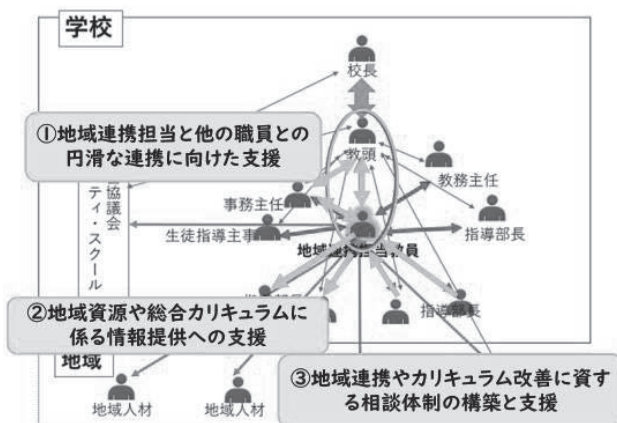


図3 地域連携担当を軸とした校内協働体制の構築に向けた総合調整

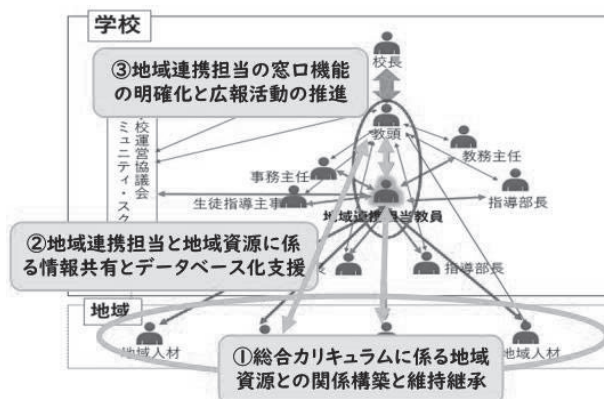


図4 地域連携担当を軸とした地域との連携連携に向けた総合調整

2.4. 検証

教職員（17人）と児童（6年生 53人）を対象に、質問紙調査を実施した。教職員に対しては20XX年5月と11月に実施した。質問項目は、総合的な学習の時間を中核とした地域連携に関する組織体制とカリキュラム改善、児童の学習状況の認識についてである。認識の変容について量的分析を行った。一方、児童に対しては20XX年7月と11月に実施した。質問項目は、総合的な学習の時間のカリキュラムにおける学習活動、地域連携に関する学習活動に対する認識についてである。また教頭の機能を基軸としたエピソード収集や地域人

材に対するインタビュー調査を依頼し、質的分析を行った。このエピソード収集やインタビュー調査については、質問紙調査結果の考察において活用し、実践開発の効果について検討を行う。

3. 結果と考察

3.1. 結果

まず教職員に対する質問紙調査の結果である（表3）。5月と11月の調査結果について、Wilcoxonの符号付き順位検定を行った。11月において平均値が高い項目については、カリキュラムに関することでは、大切だ、単元活動、学年間の共有、組織に関することでは、地域との連携協働、職員間の連携協働、組織的な地域資源の把握であった。また5月と比較して、11月の平均値が有意に高い項目については、カリキュラムに関することでは、好きだ、大切だ、単元づくりなど5項目であった。組織に関することでは、組織的な地域資源の把握や活用に関する項目を中心に5項目、児童の学習状況に対する認識である児童の姿からの成果では、主体的、探究の過程、地域のよさなど4項目であった。

表3 教職員に対する質問紙調査結果

Wilcoxon の符号付き順位検定				
質問項目		5月 平均値	< > p	11月 平均値
総合カリキュラムに関すること	1好きだ	2.50	< **	3.06
	2大切だ	2.94	< **	3.50
	3役に立つ	3.22		3.33
	4単元目標	2.88	< *	3.18
	5資質・能力	3.11		3.35
	6単元活動	3.00		3.41
	7学年間の共有	3.06		3.41
	8課題解決学習	2.44	< *	2.94
	9社会貢献学習	3.06		3.00
	10探究過程を意識した指導	2.88		3.12
	11単元づくり	2.53	< *	3.06
地域連携組織に関すること	12家庭・地域との共有	2.82		2.94
	13地域資源の把握	2.22	< **	3.11
	14地域との連携協働	2.94	< *	3.61
	15職員間の連携・協働	3.11		3.50
	16組織的な地域資源の把握	2.94	< **	3.61
	17円滑な校内連携	2.53	< *	3.22
	18組織的な地域資源の有効活用	2.35	< **	3.28
児童の姿からの成果	19主体的に取り組む	2.41	< **	3.11
	20探究の過程を意識して取り組む	2.44	< *	2.83
	21地域のよさや課題の把握	2.56	< *	2.89
	22考えを広める 深める	2.82		3.06
	23地域をよくするために考える	2.59		2.89
	24他の学習に生かす	2.63	< *	3.06

* 5%水準で有意 ** 1%水準で有意 (N=17)

次に児童に対する質問紙調査の結果である（表4）。7月と11月の調査結果について、t検定を行った。11月において平均値が高い項目については、カリキュラムに関することでは、大切だ、よくわかる、将来役に立つ、自分で情報を集めるであった。地域連携に関することでは、地域のことがよくわかる、地域のよさを感じる、他の学習に生かしているであった。また7月と比較して、11月の平均値が有意に高い項目については、カリキュラムに関することでは、大切だ、将来役に立つ、自分で課題を立てるなど6項目であった。地域連携に関することでは、地域のことがよくわかる、課題が解決できる、地域の方と話せる、もっと知りたい、地域のよさを感じるなど8項目で有意に高い結果となった。

表4 児童に対する質問紙調査結果

		t 検定		
質問項目		7月 平均値	< > p	11月 平均値
総合 カリ キュ ラム に 関 する こ と	1 好きだ	3.47		3.55
	2 大切だ	3.55	< **	3.87
	3 よくわかる	3.60		3.60
	4 将来役に立つ	3.25	< **	3.77
	5 自分で課題を立てる	2.91	< **	3.42
	6 自分で情報を集める	3.60		3.60
	7 集めた情報を整理する	3.34		3.43
	8 伝えることをまとめる	3.15	< *	3.42
	9 発表する	1.89	< **	3.49
	10 考えを広める	2.96	< **	3.49
地域 連携 に 関 する こ と	11 一緒に活動は楽しい	3.38		3.51
	12 地域のことがよくわかる	3.25	< *	3.57
	13 課題が解決できる	2.75	< **	3.36
	14 地域の方と話せる	2.66	< **	3.28
	15 もっと知りたい	2.74	< **	3.09
	16 地域行事への参加	3.17		3.00
	17 地域のよさを感じる	3.28	< **	3.60
	18 地域のよさを広めたい	2.74	< **	3.19
	19 よくするために考える	2.60	< **	3.26
	20 他の学習に生かしている	3.26	< **	3.57

*5%水準で有意 **1%水準で有意 (N=53)

3.2. カリキュラム改善に関する考察

教職員に対する調査結果において、総合的な学習の時間のカリキュラムに関する項目では、授業づくりが好きだ、大切だ、について1%水準で有意な差が見られた。また単元目標、課題解決学習、単元づくりについては5%水準で有意な差が見られた。これは、教頭の機能から考察するならば、2-②③や3-①との関係が大きいと指摘することができる。

まず2-②③については、第二筆者である教頭が、地域連携担当教員を介しつつ、カリキュラム開発に向けて担当教員を基軸として教職員への情報提供や支援、相談等を行ったことが作用しているものと指摘される。これによりカリキュラム改善に向け担当教員を中心とした組織体制の構築、総合的な学習の時間の趣旨等に関する理解の深化に伴うカリキュラム開発への組織文化醸成の契機となり、教職員の心的負担の軽減や重要性の認識に繋がったと考えられる。とりわけこれは、これまで総合的な学習の時間のカリキュラム開発の経験が少ない教員に顕著であった。一方、3-①については、改善を企図したカリキュラムについて実効性のあるものにするために、地域資源の関係構築に努めたことが挙げられる。これは2-②③の背景にある教頭の動きとして整理することができる。

これに関連した事例として地域探検に関するエピソードを挙げる。6月に工業団地への探検を計画していたが、例年訪問しトイレ等を利用させていただいた事業所から新型コロナウイルス感染防止の観点を踏まえ断り

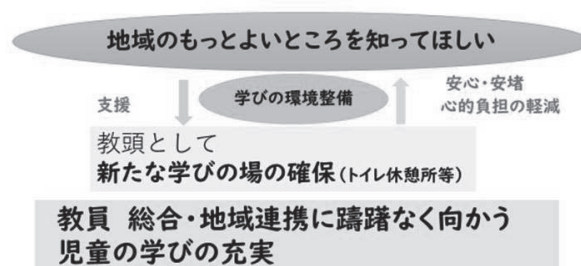


図5 新たな地域資源の開拓による学びの場の確保

の連絡が交渉を担当する学年主任にあった。これを受け学年主任から教頭に相談があった。そこで教頭が別の事業所に相談し、児童の利用について快諾をいただいた。図5は、このエピソードに関する構造図を示している。

これは、このエピソードを含む地域探検の後に学年主任が教頭に寄せた声である。

先生、地域探検でトイレの場所を手配して頂いたり、地域の方につないだりしていただいてありがとうございます。去年から、地域探検の場所を増やしたのですが、遠足にしても何にしても新規開拓は自分一人だったので大変でした。

このエピソードの背景には児童に地域のよさを知ってほしいといった学年主任の願いがあり、教頭による地域資源の開拓により新規の学習の場が保障されるとともに、地域連携に対する教員の心的負担の軽減にも繋がり、児童の学びの充実に寄与することとなった。このエピソード自体は小さなことではあるかもしれないが、学びの環境を整える地域連携にとって大きな価値をもっている。こうした蓄積により、総合的な学習の時間を中核とした地域連携に教職員が躊躇なく向かうことになっていったと考える。また併せて単元目標や単元づくり、課題解決学習といったカリキュラム開発に影響を与えたと考えられる。

3.3. 組織体制構築に関する考察

次に教職員に対する調査結果について、地域連携組織に関する項目では、地域資源の把握、組織的な把握、組織的な有効活用、について1%水準で有意な差が見られた。また地域との連携協働、円滑な校内連携について5%水準で有意な差が見られた。これは、教頭の機能から考察するならば、教頭の機能2-①②③や3-①との関係を指摘することができる。

教頭としては、教頭の機能2-①②③を働かせて、新規に設置した地域連携指導部について、校内における意義や役割に関する説明を繰返し実施し、地域連携担当教員と関係職員との円滑な連携に向けた支援に努めた。また、学年からの相談に対して、地域連携担当教員に繋ぎ、地域連携に関する相談体制を整えた。また教職員が地域資源を活用することへの心的負担の低減に向け、3-①の機能を発揮して地域資源や人材についての情報提供や地域の方の学校への思いを伝えた。

これに関連した事例として地域の方の思いを教頭が教職員に伝えたエピソードを挙げる。職員打合せにおいて、6月の田植えの学習の際に地域の方から伺った内容を伝えたものである。

6月17日の放課後、Oさんたちが田植えをしてくださいました。こんな中（コロナ禍）でも、せめて子供たちに稲刈りをやらせてやりたいという思いでやってくださいました。わたしは、Oさんたちがなぜそこまでやってくださるのか聞いてみました。すると、「わしらがうれしいのは、こうやって小学校の時に田んぼで田植えや稲刈りをして楽しかったな、ぼくたちの生まれ育ったところはいいところやったなあと、大人になっても、よその土地に行っても思ってくれることや。」とおっしゃいました。このような学びは、わたしたち教員だけでできるでしょうか。到底できませんよね。だから、こんな心強い地域の方にどんどん入っていただくことが必要になってくるんです。

この打合せの後、地域連携担当である教員や6年担任が教頭に次のような声を寄せた。

（地域連携担当）

そんなことがあったなんて、全然知らなかったです。びっくりしました。本当にありがたい限りです。明日、早速子供たちに伝えて、じゃあ、ぼくたちは地域の方にどうしていきことができるのかを子供たちに投げ掛けてみようと思います。

（6年担任）

どんな子供たちを育てなきゃいけないのかを考えました。子供たちが地域の方に進んで挨拶ができ

ることで、つながりや感謝の気持ちを表したりすることができるのでは。

このように教頭の機能の発揮により、組織的な地域連携やカリキュラム開発の重要性とともに教育的価値を教職員が感得した場面になったと考えられる。こうした背景には日常的な3-①が機能している。教頭の機能3-①を働かせて、可能な限り地域へ足を運び、地域の方と顔を合わせて話ができる関係づくりに努めた。学年から地域連携担当教員へ依頼された地域人材には事前に連絡を取り、挨拶、相談、地域行事への参加などにより地域資源との関係構築や維持継承に努めた。

各学級担任は個々に地域の方と連絡を取り合ったり、日頃から情報交換したりすることは困難である。そこで、学級担任ではない地域連携担当教員や教頭が担当授業のない時間帯に地域の方と日頃から連携を取り、関係構築や維持継承できる基盤を作っておくことが重要である。常に地域資源とカリキュラムの接続を考慮し、地域人材への働きかけや教職員への情報提供が重要であることが確認された。

3. 4. 児童の学習状況に関する考察

教職員に対する調査結果について、児童の姿としての学習状況に関する項目では、主体的に取り組むについて1%水準で有意な差が見られた。また探究の過程や地域のよさ等に関する意識・把握などについて5%水準で有意な差が見られた。児童に対する調査結果では、7月と比較して11月の平均値が有意に高い項目については、カリキュラムに関することでは、大切だ、将来役に立つ、自分で課題を立てるなど5項目であった。地域連携に関することでは、課題が解決できる、地域の方と話せる、もっと知りたい、地域のよさを感じるなど7項目において1%水準で有意に高い結果となった。

こうした例として、稲刈りを体験した児童と教頭との何気ないやりとりから、児童が地域の方と一緒に活動したよさを実感した事例を挙げる。

教 頭：稲刈りどうだった。

児童M：はじめて鎌を使ったけど、はじめはやり方がなかなかわからなくてうまく切れなかった。ボランティアの方にやり方を教えてもらってやっていくうちに、こつを覚えてぎくぎくって切れるようになって、おもしろかったよ。

児童H：ぼくは、刈った束をひもで結ぶやり方を聞いただけでは全然わからなかったけど、そばでおじさんに教えてもらいながらやったらできるようになってうれしかった。やっぱりなんでもやってみないとわからないってことが分かったよ。

この児童Hによる「なんでもやってみないとわからないってことが分かった。」からは、児童にとって様々な体験活動を経験することの教育的意義が確認できる。このような体験活動の一層の充実には、体験活動に関する事柄に精通する地域人材が必要である。今回は、25名の地域ボランティアの方が児童に関わり学習の機会を設定した。これにより児童が自身の学びへの充実を認識したため、このような声に表れた思いをもつことができたと考えられる。高学年の児童は地域の方を「〇〇の先生」と呼び、教えていただく方という認識をもっている。「やり方を教えてもらって」「分かった」などの言葉から、児童の稲作に関する課題解決や理解に対する地域人材の作用が窺える。

これらのことから、総合的な学習の時間における地域に関する探究の学びの充実が窺える。こうした背景について、教頭の機能との関係から指摘するならば、上記のような教頭の機能の発揮により、カリキュラム改善や組織体制の構築が作用したと考えられる。

カリキュラム改善については、総合的な学習の時間のカリキュラム改善の必要性や重要性を地域連携担当や各学年のカリキュラム開発担当が理解し、他の教員へ具体的に提示した。これにより全教職員がカリキュラム改善に取り組むことが可能になった。また地域連携組織の構築について、これまで個々で行ってきた地域連携を組織的に推進できるようにしたが、これにより教職員が複数で生活科や総合的な学習の時間の学習に関する情報交流や検討の場が位置付き、教職員間の連携が促進された。また地域連携担当が中心となり、地域連携に関する相談体制を整備したことで、教職員の地域連携への心的負担が低減し、地域資源や地域人

材を総合的な学習の時間の学習活動の中に積極的に取り入れることが可能となった。

4. おわりに

2017 年版学習指導要領は、社会に開かれた教育課程の理念を掲げ、総合的な学習の時間を教育課程及びカリキュラム・マネジメントの中核として位置付け、地域や学校、児童生徒の実態に応じて探究課題を設定するとともに、学校内外の教育資源を活用し、学びの充実を図ることを求めている。しかしながら取り組むべき課題が多く、その実現は各学校の創意工夫に委ねられ容易なことではない。これらの推進には、カリキュラム・マネジメントを学校経営戦略として位置付け、校内組織やカリキュラムの整備、地域連携の構築等に取り組むことが重要となる。そこで本稿では、学校経営において校長を補佐し、校務整理の要職として位置付けられる教頭の機能に着目した。地域連携を通じた総合的な学習の時間のカリキュラムの組織的改善が経営戦略上の課題となっている事例校の検討を通じて、カリキュラム・マネジメントを推進する教頭の機能について整理した。そのうえで事例校において、教頭の機能を発揮させる実践開発を行い、組織構築やカリキュラム改善、児童の学習状況への影響について検証した。

まず教頭の機能については、運営委員会構成員間の合意形成に向けた総合調整、地域連携担当を軸とした校内協働体制の構築に向けた総合調整、地域連携担当を軸とした地域との連携連携に向けた総合調整の3つに整理した。またこれらの整理をもとに教頭の機能を発揮させた実践開発を実施した。教職員に対する調査結果については、総合的な学習の時間のカリキュラムに関する項目において、授業づくりが好きだ、大切だ、単元目標、課題解決学習、単元づくりについて有意な差が見られた。地域連携組織に関する項目では、地域資源の把握、組織的な把握、組織的な有効活用、地域との連携協働、円滑な校内連携に有意な差が見られた。児童の学習状況に関する項目では、主体的に取り組む、探究の過程や地域のよさ等に関する意識・把握などについて有意な差が見られた。また児童に対する調査結果では、カリキュラムに関することでは、大切だ、将来役に立つ、自分で課題を立てるなど5項目、地域連携に関することでは、課題が解決できる、地域の方と話せる、もっと知りたい、地域のよさを感じるなど7項目で有意に高い結果となった。これらのことから地域連携に関する教頭の機能の発揮により、カリキュラム改善や組織構築、児童の学習状況に一定の効果があったことが確認された。これは本研究の成果である。

一方、本研究で残された課題として次の二点を指摘できる。一つは、カリキュラムにおいて地域連携を踏まえた探究過程の充実である。本研究では教職員の認識として地域連携に対する心的負担は低減し、地域資源をカリキュラムに取り入れることはできたものの、探究過程を真に意識したカリキュラム開発や指導には課題が残る。今後はいっそう地域資源と総合的な学習の時間の指導理念をクロスさせたカリキュラム開発を検討し質的向上を図る必要がある。二つは、校内への地域連携組織の構築により、教員の地域連携組織への有効性の認識が高まり、総合的な学習の時間において地域資源との連携を図ることができた。しかし、教職員間の連携協働のさらなる促進や、地域資源を活用したカリキュラムに関する地域や家庭との共有にまでには至っていない。今後の課題として指摘するとともに、さらなる取組を検討していきたい。

参考文献

- 池原鉄 (2013)、地域素材 (ひと・こと・もの) を活かした学習活動の展開、日本教育情報学会年会論文集、29、pp.42-45
- 岩永定 (2012)、学校と家庭・地域の連携における子どもの位置、日本教育経営学会紀要、54、pp.13-22
- 田村学 (2017)、これからの総合的な学習の時間を考える、黒上晴夫編、平成29年度 小学校新学習指導要領ポイント総整理 総合的な学習の時間、東洋館出版、pp.1-10
- 長倉守 (2020)、総合的な学習の時間における探究過程の事例分析－「整理・分析」に着目して－、岐阜大学教育学部研究報告人文科学、68(2)、pp.163-171
- 中留武昭・曾我悦子 (2015)、カリキュラムマネジメントの新たな挑戦－総合的な学習の時間における関連性と協働性に焦点をあてて－、教育開発研究所、pp.32-58
- 無藤隆 (2017) 新学習指導要領が果たす役割、黒上晴夫編 (2017)、平成29年度 小学校新学習指導要領ポイ

ント総整理 総合的な学習の時間、東洋館出版、 pp.14-19

文部科学省 (2017)、小学校学習指導要領 (平成29年告示)、東洋館出版社、335p.

文部科学省 (2017)、小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 総則編、東洋館出版社、263p.

文部科学省 (2017)、小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 総合的な学習の時間編、東洋館出版社、187p.